

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05930

研究課題名（和文）ロシア史のなかのイスラエル 帝国崩壊と戦時暴力のシオニズムへの影響

研究課題名（英文）Israel through Russian history: The Effects of the Imperial Collapse and War-time Violence on Zionism

研究代表者

鶴見 太郎 (Tsurumi, Taro)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00735623

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,500,000円

研究成果の概要（和文）：ロシア帝国に生まれたシオニズムが、帝国の崩壊とその際にユダヤ人に降りかかったポグロムという暴力の影響をどのように受けたのかを探った。ロシア語の定期刊行物を素材に、特に、自由主義系のシオニストの言論を、非シオニストのユダヤ系自由主義者を参照しながら、分析していった。シオニストを含むユダヤ人にとって、ポグロムは、秩序あるロシア国家が崩壊したことにより、ならず者が蔓延るようになってしまったことが背景にあると認識されることがあった。ここに、秩序の担い手としての国家という意識が生まれた。その一方で、ロシア人への不信感が高まり、集団としての自立が志向されるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パレスチナ紛争は今日まで続く中東や世界史における主要な紛争である。その解決のためには、その原因を体系的・歴史的に探る必要がある。シオニストがそもそもなぜ国家を建設しようとしたのか、その他者に対する態度は何かといった論点を精緻にたどることは、その重要な第一歩であるが、その観点からロシア帝国時代に遡る研究は皆無である。本研究は、シオニストの国家観や他者観の基礎となった時期の重要な一つとして帝国崩壊期を設定し、具体的な歴史の展開のなかでそれらがどのように生まれ、またどのような特質を持っていたかを明らかにした。続く時代においてパレスチナにおけるアラブ人を中心とした人々との関係性を探る前提を見出した。

研究成果の概要（英文）：This project examined how the collapse of the Russian Empire and pogroms that occurred in that process affected Zionism, which emerged in the Empire. With reference to Russian periodicals including those by non-Zionist Jewish liberals, the following has been revealed. In their understanding, pogroms occurred as a result of the disorder after the collapse of the strong Russian state, which enabled bandits to behave freely. Moreover, the Zionists had distrust toward the Russians and became aware of necessity to make the Jewish people independent of other peoples.

研究分野：歴史社会学

キーワード：ユダヤ人 ロシア帝国 シオニズム 自由主義 ポグロム 暴力 アイデンティティ 定期刊行物

1. 研究開始当初の背景

今日まで解決を見ないまま、ますます複雑化しているいわゆるパレスチナ問題は、ポーランドの大半を含む旧ロシア帝国を中心としたロシア・東欧地域のユダヤ人を母体とするシオニスト運動によるパレスチナへの入植活動とその後の国家建設に淵源を持つ(20世紀初頭のユダヤ人口は、久しく「シオニズムの父」とされてきたヘルツルが活躍したドイツ52万に対してロシア帝国520万)。しかし、従来、シオニスト運動が隆盛化した背景として、汎ヨーロッパ的な現象である反ユダヤ主義の激化や国民国家体系の拡大が漠然と指摘されるにとどまり、ロシア・東欧地域の文脈に即した研究の蓄積は少ない。ロシア・東欧系のシオニズムに特化した研究は少なからず存在してきたが、ユダヤ民族史の枠にとどまる傾向が強く、非ユダヤ史や地域的・国家的枠組みとの関連づけが弱い(代表的な研究として、J. Frankel, *Prohecy and Politics* (1981), Y・マオル『ロシアのシオニズム』1986[ヘブライ語])。近年、ロシア・東欧ユダヤ史学でも、イスラエル研究でも、それぞれの地域固有の文脈に即した歴史的展開を析出する研究が増加している。しかし、前者ではシオニズム以外の動きに主要な関心が移っており、後者ではますますパレスチナ外の動きとの関連づけが弱くなり、結果、ロシア・東欧史とイスラエル史の研究上の分断はさらに拡大している。

2. 研究の目的

パレスチナ問題がヨーロッパ近代に端を発することはよく知られてきたが、その際の「ヨーロッパ」は画一的に捉えられてきた。パレスチナ/イスラエルに実際に移民したユダヤ人の大半はロシア・東欧地域、なかでも旧ロシア帝国領の出身であった。だが、ロシア・東欧史の一部としてシオニズムやパレスチナ問題の歴史を検証する作業はほとんど行われてこなかった。本研究は、そのなかでもロシア語圏とのかかわりを明らかにするために、20世紀前半、特に戦間期における、ロシア語圏のシオニストの世界観や自己認識の変遷を、他のユダヤ人・非ユダヤ人の諸運動・思想との比較のなかで検証する。その際、応募者自身は帝国の崩壊や戦時暴力が及ぼした影響を検証しつつ、より包括的には、国際的な共同研究ネットワークの拡大・深化にも努める。

3. 研究の方法

4年間の研究計画としては、まず、これまでに蓄積してきたロシア語文献の分析を完結させる。次いで、第一次世界大戦期・戦後期を中心に、人文社会諸科学の成果も含め、人間社会における暴力の影響に関する知見を渉猟し、それを手掛かりの一つとしながら、パレスチナで主に流通するようになっていくヘブライ語刊行物の分析を開始していく。一次資料については、上述の定期刊行物の内容を、相互の関連に注目しつつ歴史学の諸成果に照らしながら分析することを柱とする。並行して、非ユダヤ系のロシア・東欧史と、アラブ・パレスチナ関連の研究者との連携を探る。自らの成果発表にとどまらず、それを国際的なネットワークのなかに位置づけ、またロシア・東欧史とパレスチナ問題の歴史を繋げる共同研究のために、最終年度に国際会議を東京で開催する。

これまでの研究で用いた、定期刊行物における諸議論の内容を、先行研究が明らかにしている当時の制約条件と突き合せながら読み解いていく方法を基本とするが、これに加えて、分析対象の多くの定期刊行物の後半に含まれているニュース欄の分析も加えることで、亡命・移民先各地において、各刊行物に集っていた人々がどのような現状認識を持っていたのかを把握していく。上述の目的に鑑み、特に帝国崩壊状況や、ポグロム等の反ユダヤ的暴力や政策、当時最高潮にあったポーランド・ナショナリズムなど非ロシア系ナショナリズムの状況、第一次世界大戦の従軍・協力や被害の経験、ユダヤ人ネットワークなどがどのように記述されているかに注視する。

歴史的には、ロシア語圏やポーランド語圏などのディアスポラのシオニストは、のちのシオニスト右派である修正主義系の勢力が中心であり、それに対してパレスチナでは左派の労働シオニストが主流という違いがある。大戦期・帝国崩壊期にディアスポラで多くの困難に直面したことがこうした構図に影響を与えた可能性もあるが、その点についてはいまだ検証されていない。本研究はこの点にも注視する。

4. 研究成果

今回、2つの国際会議(ワークショップ)を開催し、そこで得られた成果の一部を『イスラエルの起源』という書籍として刊行した。それぞれ業績に記したとおりである。

理論的には、心理学の自己複雑性理論を援用して、自己を多面的存在としてとらえたうえで、各側面同士がどのように関係しあっているのかを問題とする視座を提出した。上記書籍の第1章に詳細が載っている。

そこでの要点は以下である。自己のなかに2つのエスニックな側面を持った個人を想定する。例えば、ユダヤ人としての側面とロシア人としての側面である。両側面の関係性としては、5つのパターンに分けることができる。まずは、側面同士がかなり重なり合っている場合で、これは2つに分けられる。1つは、側面同士の関係性が親和的であるもの。これを融合型と呼ぶ。もう

1つは、緊張関係にあるもので、これを不協和音型と呼ぶ。次に、側面同士が相互にある程度区別しあえる場合である。これは以下の3つに分けられる。相互に不干渉で、場面による使い分けがなされる場合を併存型と呼ぶ。一方、相互に補完しあうような関係にある場合は相補型と呼ぶ。他方、矛盾した関係にある場合は矛盾型と呼ぶ。

帝政期終盤において、ユダヤ人は様々な潮流に分かれた。そのなかで、自由主義やその周辺に位置していたのが本研究の対象となるユダヤ人である。彼らは「ロシア・ユダヤ人」として自らをアイデンティファイしていた。もともとは上記の併存型に近かったが、次第に相補型か矛盾型に分かれていくことになる。最も典型的に相補型であったのが自由主義者である。弁護士であり立憲民主党のペテルブルク代表を務めたマクシム・ヴィナヴェルを筆頭に、ユダヤ人であることとロシア人であることが単に併存しているのではなく、ユダヤ人の無権利状態をロシアの体制の欠陥の典型例と捉え、ロシア全体を変革することを目指すロシア人の自由主義者らと共闘することになった。彼らはロシア人としての意識も強かったが、その際に、この構図のなかでユダヤ人に意識が向くことにもなった。ユダヤ人としても、ロシアにおいてこそ、その西欧文化の伝播者としての役割や経済における固有の役割を発揮できると考えており、ロシアにおいてこそ活躍ができると考えていた。このように、ユダヤ人であるからこそロシア(人)を必要とし、ロシア人であるからこそユダヤ人を重視するという相互補完的な関係が彼ら自身のなかに見られたのである。

一方、シオニストも当初はこのような意味でのロシア・ユダヤ人意識をそれなりに持っている場合が多かった。これは前著『ロシア・シオニズムの想像力』で特に明らかにしたところでもある。しかしながら、1917年のロシア革命後に訪れた内戦期において、それまでの比ではない凄惨なポグロムが発生し、ロシアへの信頼は揺らいでいくことになる。それ以前から、ユダヤ人であることと、ヨーロッパ人であることの矛盾を説く議論はシオニストのなかで見られるようになっており、ポグロムや経済的な苦境(=ロシアの社会経済構造の変化によって、ユダヤ人であることのメリットが減じられていく状況)のなかでロシアとの一体感を持てなくなっていたユダヤ人は増えていた。

こうして、自己のなかの民族的側面をユダヤ的なそれに一本化する方向性がシオニズムのなかで強まった。私はこれを、シオニズムにおける軍事化の本格化として論じた。なぜなら、軍事の論理は敵と味方を明確に分別することに始まるからである。自己のなかに「敵」と共通の側面を持っている場合、簡単に「敵」に武器を向けることはできない。しかし、一本化できていればそれは容易となる。

ただし、ロシアにおいて身に着けた側面のすべてを捨て去ったわけではなかったことも重要である。彼らは、「西」としての自負は持ち続けていた。それは単に「東」のアラブ人に対して漠然とした優越感を持っていたことに留まるものではなかった。

ポグロムの経験は、一方で、国家機構の安定が崩れ、他方で野蛮な人々がその機会に乗じて略奪やレイプを行うこととして記憶された。それがパレスチナで起こった1920年や21年、29年のアラブ人による反シオニスト暴動に対する認識に影響を与えていたことが確認された。すなわち、一方でイギリス当局が(シオニストからすると)十分な対策を講じず、他方で、野蛮なアラブ人、ないし、アラブ人のなかの野蛮な分子がユダヤ人を襲うという構図である。ここから、シオニストは自前の国家を建設すること、すなわちイギリスを頼らない方向に傾いていくことになったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鶴見太郎	4. 巻 19
2. 論文標題 自己を側面に分けて考えるーロシア・ユダヤ人がロシアを離れるまでの歴史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アメリカ太平洋研究	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴見太郎	4. 巻 31
2. 論文標題 極右政党「イスラエル我らの家」の背景.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 25, 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴見太郎	4. 巻 0
2. 論文標題 ソ連・ロシアの対パレスチナ政策 放置されるロシアの飛び地	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臼杵陽・鈴木啓之編, 『パレスチナを知るための60章』	6. 最初と最後の頁 222-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴見太郎	4. 巻 0
2. 論文標題 ユダヤ人問題 ロシアとユダヤの複雑な関係	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 下斗米伸夫編, 『ロシアの歴史を知るための50章』	6. 最初と最後の頁 100-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 International Relations Within: When Russian Jews Become (Israeli) Jews
3. 学会等名 2018 SNU-UT Joint Sociological Forum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 自己を面に分解して考える ロシア・ユダヤ人がロシアを離れるまでの歴史
3. 学会等名 CPAS公開ワークショップ「ネットワークで世界を描く」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 Jewish Self-Complexity: A Case in the Russian Empire
3. 学会等名 International and Interdisciplinary Workshop "International Relations Within Self-Complexity in Ethnic Conflict and Coexistence", University of Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 The Origin of Jewish Separatism: Extinction of an Aspect or Emergence of a New?
3. 学会等名 International and Interdisciplinary Workshop "International Relations Within Self-Complexity in Ethnic Conflict and Coexistence", University of Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 相補的ハイブリッド性 ロシア・ユダヤ人と自己を引き立てる他者
3. 学会等名 日本社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鶴見太郎
2. 発表標題 イスラエル・リアリズムの起源 ロシアからの視座
3. 学会等名 日本ユダヤ学会関西例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Taro Tsurumi
2. 発表標題 Comments
3. 学会等名 International Symposium Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taro Tsurumi
2. 発表標題 Comments
3. 学会等名 Lavy Colloquium "Israel's East European Lineages: Russian and Polish Jewish History, Zionism, and Israeli Political Cultures," The Johns Hopkins University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 若林幹夫、西野淑美、中村牧子、五十嵐泰正、砂原庸介、太田省一、立岩真也、相馬直子、遠藤知巳、鶴見 太郎、中村秀之、佐藤俊樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 409
3. 書名 社会が現れるとき	

1. 著者名 赤尾光春、向井直己、山本伸一、後藤正英、高尾千津子、鶴見太郎、西村木綿、宮崎悠、野村真理、ベル・コトレルマン	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 342
3. 書名 ユダヤ人と自治 中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡	

1. 著者名 鶴見太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 290
3. 書名 イスラエルの起源 : ロシア・ユダヤ人が作った国	

1. 著者名 Yukiko Tatsumi, Taro Tsurumi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 261+viii
3. 書名 Publishing in Tsarist Russia: A History of Print Media from Enlightenment to Revolution	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 International Relations Within	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Identity's Allies and Labels: History of Identity Categories in Eastern Europe and Palestine/Israel	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------